

第1章 数少ない出生率上昇地域における子育て支援とは

- NPO法人 子育てサポートセンター きらきらくらぶ -

はじめに

出生率の低下に歯止めがかからない状況が続いている。その一方で、幼児虐待や育児放棄、DV など、子育てにかかわる痛ましい事件が後を絶たない。一方では子どもを多く生み育てることが期待され、他方ではせっかく生み育てた我が子を傷つける。その渦中にいるのが孤独な母親である。子育てをめぐる状況はあらゆる側面においてきわめて難しい状況にある。特に人口の集中する大都市圏においては、人口の量的な過密とは裏腹に、地域社会の空洞化・過疎化が質的に進み、地域住民はとて孤独な状況に追い込まれている。

こうした状況をいかに打破していけばよいのだろうか。そのヒントを与えてくれるのではないかと思えるのが福井県である。後述のとおり、福井県は全国的にも稀（そういわずに言えなければならぬこと自体、極めて残念なことであるが）に、出生率の増加が認められる県である。どうして福井では出生率が上昇しているのだろうか。その秘密の一端でも知りたいと考えたことが、本章で福井県の事例を取り上げるそもそもの理由である。無論、その秘密をすべて解明することはできない。しかし、出生率が上昇している地域にあって、どのような子育て支援体制があるのか、それは他の地域とどこが同じでどこが違うのだろうか、そうしたことだけでも知ることができれば有意義ではないのかと考えたのである。

そこで本章では、福井県敦賀市で精力的に活動している「NPO 法人 子育てサポートセンター きらきらくらぶ」（以下「きらきらくらぶ」と略）の事例を紹介する。その手順は、次の通りである。まずはじめに、「きらきらくらぶ」の背景を探るために福井県の子育て事情を考察し、次に、「きらきらくらぶ」が敦賀市の委託事業として行っている「おやこきらりん広場」（以下「きらりん広場」と略）を取り上げる。そして最後に、「きらきらくらぶ」本体の活動を明らかにする。「きらきらくらぶ」の活動を通して、どのような子育て支援のヒントが見つかるのであろうか。その実態に迫っていってみよう。

1. 福井県の子育て事情

いま福井の子育ては、一躍脚光を浴びている。それは、2005年の合計特殊出生率が1.47と全国2位になり、出生率が前年と比べて上昇した全国唯一の県となったからである（2005年国勢調査）。少子化に悩む自治体が多い中、福井県の出生率上昇の要因が様々なメディアで取り上げられ、世間から注目されている。

出生率が上昇した本当の理由はともかくとして、本節では、様々なデータから福井の子育ての特徴を明らかにし、福井県の子育て事情を探っていくことにする。

福井の子育ての特徴の1つ目は、女性のみならず子育てを押しつけない点である。福井県の女性就業率は52.6%で全国2位、共働き世帯の割合は60.5%で全国1位となっている（2000年国勢調査）。福井県では、女性の社会進出がすすみ、働く母親も多いと考えられる。そうした中で、いろいろな人の手を借りながら子育てをしている様子が見える。

特徴の2つ目は、親族で支え合う点である。福井県の3世代同居世帯の割合は23.1%で全国2位となっている（2000年国勢調査）。3世代同居の利点は、子育ての手が多いことである。

両親が不在の時に、祖父母が子守をしたり、保育所等へ送迎したりするなど、家庭内で支え合うことができる。福井には、親族が子育ての手伝いをする土壌があるのかもしれない。

特徴の3つ目は、地域で支え合う風土がある点である。支え合う前提となる地域での交流の様子をみると、交際費は全国3位、つきあい費は全国4位など、人とのつきあいを重視する傾向にある(1999年全国消費実態調査)。また、福井県では、集落内で同じ寺の檀家が集まって「お講」が行われてきたなど、昔から地域内での交流が盛んであった¹⁾。地域交流が活発な中で、さらにボランティア活動へ参加した人の割合(15歳以上年間参加者率)は、36.6%で全国5位と、比較的高い割合になっている(2001年社会生活調査)。このように、福井では地域でみんなが協力して子育てを支え合う風土が育まれているといえよう。

特徴の4つ目は、行政の子育て支援が充実している点である。主要なものは、以下の3点である。第1に、「すみずみ子育てサポート事業」である。これは、2004年度から始まった事業で、保護者が通院や冠婚葬祭、学校行事等へ参加する場合、NPO法人やシルバー人材センター等が、一時預かり、保育所・幼稚園への送迎、生活支援(家事のお世話等)などを行ってくれる子育て支援事業である。後述するように、「きらきらくらぶ」が行う一時預かりにおいては、利用料の半額(1時間あたり標準利用料700円のうち350円)を県が助成する(助成費は団体に支払われる)。2005年度はのべ約6300人がこの事業を利用し、2006年度は9月末で昨年度利用実績を既に上回り、活発に利用されている。

第2に、「子育てマイスター地域活動推進事業」である。これは、子育て中の保護者が抱く悩みや不安を解消することを目的にした事業で、2005年度からスタートした。詳細は、まず保育士、医師、看護師、保健師、教諭、社会福祉士といった有資格者を「子育てマイスター」として登録する。「子育てマイスター」は、ボランティアで、児童館や公民館などで子育て相談を行ったり、子育てサークルへ助言を行ったりする。2006年度からは新聞紙上に週1回「マイスター便り」のコーナーを設け、育児のヒントなどを紹介する活動も始めた(福井新聞)。「子育てマイスター」には、約400人が登録している(2006年4月現在)。

第3に、「ふくい3人っ子応援プロジェクト」である。2006年度から始まったもので、子どもがたくさんいる家庭を経済的に支援する事業である。内容は、3人目以降の子どもは、生まれる前の妊婦健診費から、3歳に達するまでの通常保育料や病児保育、一時保育、すみずみ子育てサポート等の利用料、医療費を原則無料化することである。

女性だけに任せるのではなく、親族や地域の人々が協力して子育てをする。行政側も、子育て支援を積極的に行う。こうしたことが、福井の子育て事情の一端であるといえよう。

このように福井県全体の状況として見れば、出生率は上昇し、子どもを育てやすい環境が整っており、様々な支援制度が整備された理想的な子育て県としての姿を想像しがちである。しかしもう少し個別の状況を見るならば、手放しで楽観できる状況ではないということが分かる。そこで、本章において取り上げる敦賀市の状況をごく簡単に見てみよう²⁾。

敦賀市は古くから大陸との窓口として栄えた港町であり、現在は多くの原子力発電所を抱える都市である。合計特殊出生率は、2005年現在1.48と全国及び福井県全体よりも高い数値を示している。しかしながら、18歳未満の人口は過去10数年に渡って減少し続けており、この動向については全国的な動向と同じである。また、電力関連の産業に絡んで人口の流入・転出が頻繁で、その影響から核家族世帯の割合が全国及び福井県よりも高い水準である(2000年現在60.1%)。女性の就労率に関して見ると、敦賀市の場合には20歳代前半に78.2%(全国

70.5%)、40歳代後半に75.6%(全国70.3%)と全国平均を大きく上回る高いピークを示す一方、30歳代前半に55.2%(全国57.0%)と全国平均を下回る値を示している(いずれも数値は2000年)。確かに女性の就労率は県全体としては高い傾向が見受けられるのであるが、敦賀市に関して言えば、これは当てはまらない。少なくとも子育て期に当たる30歳代の女性の就労率は全国平均を下回っているのであり、それだけに、周囲から孤立しがちな子育て環境におかれている可能性が高いとも言えよう。

以上のことを踏まえると、福井県敦賀市は、地域で協力しながら子育てを行うといった古くからの村落共同体としての側面と、人口の転入出が多く核家族が多く孤立しがちな子育て環境に陥りがちという極めて都市的な側面という2つの矛盾する側面を併せ持った地域と言えるのではなかろうか。そうした地域にあって、なぜ高い出生率を示す結果となっているのだろうか。具体的な子育て支援活動を取り上げて、その秘密の一端を明らかにしたい。

2. きらきらくらぶ

「NPO法人子育てサポートセンターきらきらくらぶ」は全国的に見ても子育て支援団体の草分け的存在とも言える団体であり、約15年の実績を持っている。未就園児の預かり保育を柱に、精力的に子育て支援活動を行っており、敦賀における子育てを語る上で欠くことのできない存在である。本節では、まず「きらきらくらぶ」本体の活動の概要と設立の経緯について紹介する³⁾。

(1) 「きらきらくらぶ」保育事業の概要

敦賀駅からバスで15分ほどのところにある生協スーパー「ハーツ」敦賀店の一角に「きらきらくらぶ」がある(図1参照)。

「きらきらくらぶ」の活動は、保育事業と2つの支援事業の3つの柱から成っている。

まず保育事業では親子保育で2種類、預かり保育で3種類の保育活動が展開されている。

親子保育は、子どもを集団の中で育てたいが、子どもを1人で預けるにはちょっと不安という母親たちを対象として行われる保育活動で、母親自身も子どもの成長を実感することができる。また、母親同士が顔をあわせ、話をするにより、育児の不安や悩みの解消が期待できる。親子保育は2つのクラスが設定されている。

1・2歳児対象の「プレイルーム」が週1回、1時間半行われる(場所は他のショッピングセンター内)。年保育料・月保育料共に4,500円である⁴⁾。1歳未満児対象の「きらきらベビィ」は2週に1回、1時間半行われ、年保育料、月保育料共に1,000円である。

子どものみを預かる「きらきらキッズ」は、「きらきらくらぶ」の中心となる活動で、2・3歳児を対象に週2回のコースが2種類(月・木コースと火・金コース)用意されている。保育時間は朝8:30~11:30の午前中3時間である。週2回のコースを基本とし、保護者の要望に応じ週5日まで預けることが可能である。年保育料は4,500円、月保育料は7,500円である。

また、夏休み等の長期休暇中に、幼稚園児・小学校低学年児童を対象とし、特別なプログラム



図1 「きらきらくらぶ」の建物

を組んで子どもを預かる「わんぱく Kids」も行われている。保育料は 900 円程度である。

さらに、2007 年 4 月から、第 1 節で触れた「福井県すみずみサポート補助事業」として、「きらりんるーむ」という一時保育が開始される予定になっている。月曜日から金曜日の 8:30 から 17:30 までの間、敦賀市に住民票のある人は小学校 3 年生の第 2 子までは 1 時間 350 円で、敦賀市外からの子どもは 1 時間 700 円で預かる。なお、第 3 子以降 3 歳の誕生日まで保育料は無料である。原則として預ける前日までに予約が必要だが、緊急時には当日でも預かってもらえるという。

このように、「きらきらくらぶ」の保育事業は、極めて多様に展開されている。預かり保育に対するニーズは非常に高く、よく利用されている。例えば、近隣の商店の方が少しだけ預けに来たり、隣のスーパーで午前中だけパートの仕事をしている母親が預けていたり、年度途中で仕事を始めて週 3 回でも子どもを預けて仕事に行かれる方など、様々に利用されているという。また、母親だけではなく、毎日孫の面倒を見ているおばあちゃんが預ける場合もあるという。「週に 2 回だけでもここに来ることでずいぶん楽や」と喜ばれているようだ。始めた当初は 10 人程度だった預かり保育（きらきらキッズ）も、現在では約 130 人の子どもを預かっているという。

（２）「きらきらくらぶ」支援事業の概要

2 つある支援事業のうち 1 つは、後に紹介する「おやこきらりん広場」であり、残る 1 つが、子育て情報誌「きらりん」の編集・発行、子育て相談、親子イベントの開催である。

情報誌「きらりん」は「きらきらくらぶ」のスタッフによる手作りの情報誌で、年 1 回発行される。「おやこきらりん広場」の活動やイベントの様子、子育て支援講座の告知、お出かけスポットの紹介や、病気への注意喚起等、子育てに関する盛り沢山の情報が丁寧にまとめられている。

また「きらきらくらぶ」はインターネットのホームページを開設しており、ブログもある。利用者は印刷媒体による告知よりもタイムリーに情報が取得でき、ある意味ではこれが情報誌を補う関係にあるとも言えよう⁵⁾。

子育て相談としては、例えば県内の NPO のイベントあるいは福祉施設のイベントにおいて子育て相談の窓口を設け、相談を受け付ける他、日常の保育活動の中で母親たちと会話する中で自然と子育て相談になっていくケースもあるという。特別に相談業務に特化した活動は実施されていないが、その代わりに、いつでも気軽に子育ての相談を受け入れられる体制作りがなされているようである。

親子イベントとしては、2004 年の秋に「子づれ父ちゃん秋ツアー」という遠足イベントを開催している。また 2005 年には「福井県父親の子育て力向上推進事業」として、10 月に「ハロウィンパレード」とそのプレ企画としての「衣装作り」を、11 月には外部講師を招いて「いきいきパパ講座」を開催している。いずれも父親が育児に参加するだけでなく、育児に協力し、さらに父親のネットワークをつくることを狙いとして企画されている。林さん自身はこうした企画を開催してみて、相当の手応えを感じている様子であった。今後も充実した企画の展開が期待される場所である。

（３）「きらきらくらぶ」設立のきっかけ

このように非常に多彩な「きらきらくらぶ」はどのような経緯で設立されたのだろうか。

代表の林さんが子育て支援の活動に取り組み始めたのは今から 15 年程前のこと、母親とし

て寂しさと不安を感じたことがきっかけだったという。保育士でもあった林さんが子育ての中で痛感したのは、保育士と母親の違いだった。保育士の時は先輩保育士が保育の仕方をあれこれとアドバイスしてくれるが、母親になると、子育ての仕方をアドバイスしてくれる人はいなかった。保育士は様々な勉強を重ねて資格を取り、仕事を続けるが、母親は保育士のように勉強して「母親」になるわけではなく、ある日突然母親になる。育児の仕方が分からず困り、不安が募るが、それを和らげてくれる人も環境もなかった。子どもを連れていてと謝ってばかりで、褒められることはなかった。そうした母親としての不安を何とかしたいという思いが、今日の活動の根底にある。

思い悩んだ林さんはもう一度母と子の育ちについて学びなおそうと考え、通信教育で学び、1991年に主婦の友社の「ミニ・プレイルーム」を敦賀市内に開設した。そこに通っていた母親から「子どもだけ預かってもらえないか」と相談を受けたのをきっかけに、「ミニ・プレイルーム」とは別に預かり保育を始め、以後活動を拡大していくこととなった。1992年には3歳児の預かり保育を週2日のペースで開始、その後別の場所で「親子保育」という形で週1回の預かり保育も実施した。一時は敦賀市内の私立幼稚園の中で週2回の2歳児の預かり保育も行った⁶⁾。やがて幼稚園のスタッフとして一緒にやらないかという誘いがかかったが、それでは自分たちのやりたいことができないということで幼稚園を出ることになった。2001年のことである。

(4) 任意団体から NPO 法人へ

幼稚園の中で預かり保育をしている時にはそれなりの信用が得られていたにも関わらず、一旦幼稚園の外に出て、再び任意団体として子育て支援の活動に取り組もうとしたときに、場所ひとつを借りるにしても、「営利目的では貸せない」、「一団体には無理」という理由で借りることができなかった。自分たちは別にお金を儲けようと思って活動しているわけではないのに、心無い言われ方をすることもあったという。林さんは「それは絶対におかしい」と考え、なんと県知事に直接メールを打った。さらに驚いたことに、メールを読んだ県知事から、数日中に「NPOという方法があります」と返事が来て、県の担当部署とすぐに話し合うことができたという。林さんの行動力と県知事と行政の素早い対応が、NPOの設立を支えたのである。

様々な手続きを経てNPOとしての認証を受けたのは、2002年4月であった。現在の活動場所、生協スーパー「ハーツ」の建物に移動したのも、法人格を取得した2002年のことである。偶然にも、生協側が子育てをコンセプトとしたスーパーを展開したいと考え、NPOと連携した事業を模索していたという。「きらきらくらぶ」の法人格取得はまさに絶妙のタイミングで、両者の利害が一致した形となった。このため「きらきらくらぶ」は建物の設計段階から関わることができ、現在使用している建物は「きらきらクラブ」のために設計されたものであるという。現在、生協とは賃貸契約を結び、月額30万円の賃貸料を支払っている。「きらきらくらぶ」は子育て関連のNPOとしては福井県内で初の設立ということで、新聞でも取り上げられ、注目を集めた。

法人格を取得したことにより、それまで以上に自分たちの責任を自覚し、自分たちがしていることを、外に対してより積極的にアピールする必要が生じた。「敦賀の子育てが中央に置いていかれないようにって思うんです」と林さんは語る。そのためには、「集いの広場全国連絡協議会」をはじめとする東京や大阪などで開催される会合や勉強会にできるだけ参加するようにし、中央での動きに常に気を配り、いち早く新しい情報を得て学ぶよう心がけている。また、東京、横浜、四国など全国あちこちを見て歩き、企画を立てる際の参考にしているとのことだった。

NPO の会員は賛助会員とボランティア会員から成立っている。いずれも入会金 500 円、年会費 1 口 500 円となっているが、ほとんどの会員がボランティア会員で入会しているとのことである。財政的には会員からの会費収入が年間 7 万円程度であり、その他は保育料でほとんどを賄っているとのことである。イベントについては、助成金を申請し、その中で収まるように運営しているとのことであった。ちなみに昨年度の決算では、事業費は 2000 万円程度という。法人格を取得したために、税金や労務関係の事務処理が煩雑になってしまったそうである。

(5) 運営上の課題

NPO として運営していく上での課題として、林さんが第 1 に挙げたのは、周囲の理解不足である。NPO とは何かということを常に説明しつつ進めていかねばならない状態が、まだまだ続いているという。

さらに、やはり経営上の問題が挙げられた。NPO はスタッフのボランティア精神に依るところが大きいですが、熱意や思い入れだけでは経営は成立しない。スタッフの生活も家庭の事情も考えつつ、いかにして満足して働けるような経営を成り立たせていくか、そこがとても難しいという。そのためにも、スタッフ同士が助け合えるところは、助け合いながら進めている。子どもを相手にした仕事でもあり、何よりもスタッフ同士の人間関係がとても大事であるという。

では次に、「きらきらくらぶ」の支援事業のひとつである「おやこきらりん広場」を取り上げ、より具体的な活動の中身を見ていこう。それによって、「きらきらくらぶ」の活動の特徴が、より具体的にイメージできるはずである。

3. おやこきらりん広場

(1) 「きらりん広場」の概要

本節では、「きらきらくらぶ」が、敦賀市の委託事業として行っている「きらりん広場」(敦賀市つどいの広場事業)を紹介する⁷⁾。

未就園児とその親のための「きらりん広場」は、2004 年 7 月からスタートした。施設は、「きらきらくらぶ」とは別の建物を用いており、「きらきらくらぶ」から歩いて 10 分ほどのところにある、生協職員の寮にある会議室を改造した部屋を月額 44,000 円で借りている。寮は、昼間は職員の方は仕事で不在のため、「広場」の子どもたちが騒がしくても迷惑がかからず、また、寮の駐車場の空いたスペースを、車でやってくる「広場」利用者に無料で使わせてもらっている。寮の方と相談して、上手に施設を利用している。

この広場を始めたきっかけは母親からの声であった。「きらきらくらぶ」のプレイルームを利用していた母親から、集いの広場のようなものを開いてくれないかという要望が出された。当時、敦賀市には、子育て広場は子育て総合支援センター内の 1 か所しかなく、近隣住民の人以外には利用しづらい状況にあった。そうした声を聞いた「きらきらくらぶ」代表の林さんが行政側に向けあい、市内で 2 つ目の子育て広場となる「きらりん広場」が開設されることになったのである。

「きらりん広場」は、月曜日から金曜日の 10 時から 16 時まで開いており、「きらきらクラ



図 2 「きらりん広場」での活動の様子

ブ」のメンバーであり、かつ保育士の資格を持ったスタッフが2名以上常駐している。活動内容は、基本的には、ノンプログラムである。広場に集まった親子が、絵本を読んだり、おもちゃで遊んだり、室内用の滑り台をすべったりして、思い思いに過ごす。時には、子どもたちのリクエストに応じて、歌を歌ったり、手遊びをしたりすることもある(図2参照)。その他、お誕生日会や、月の「お楽しみ企画」がある。2006年には「わくわくハイキング」、「さつまいもクッキング」、「納涼会」等の「お楽しみ企画」が行われた。

参加者数は、1日に平均して親子20組くらいである。参加者は、最初に利用するとき登録カードを記入するようにしているが、登録者は969名にのぼる(2006年12月現在)。参加者層は、車で10分か20分程度で来ることができる人が大半である。敦賀には原子力発電所がある関係で通勤族が多く、そうした家庭の専業主婦の方が利用することも多いという。また、昔から住んでいる方も利用しており、祖父母が孫を連れてくることもある。

財政面では、市から年間約470万円が支給され、家賃、スタッフの人件費、備品購入費等の運営費に充てられる。運営費は、行政からの予算で全て賄うことができるので、参加者は広場を無料で利用できる。

(2)「きらりん広場」の特徴

みんなでひとつ

「きらりん広場」の特徴はみんながひとつになれることである。これには2つの側面がある。

第1に、参加者とスタッフがひとつになれることである。「きらりん広場」では、参加者とスタッフはとても仲が良いという。それは、スタッフの心構えによるものである。スタッフによると、広場は子どもの遊び場という側面もあるが、「母親がゆったりすることが一番だと思っている。ゆったりとして、母親と保育士と話すことが、求められていることだと感じている」という。子どもを部屋の中で遊ばせている間、スタッフは母親の話し相手や相談相手になるのである。子どもに関することは勿論、夫の子育てに関することや、幼稚園に入れる方がいいのか保育園に入れる方がいいのかとか、同居している祖父母の問題とか、よろず相談が行われる。様々な話をする中で、参加者とスタッフとの距離が縮み、一体感が生まれてくるのである。

第2に、参加者同士がひとつになって活動できることである。参加者によれば、「市の子育て総合支援センターには、大勢の人が来るので、母親同士のグループができてしまう。そのグループに入れないと、センターで親子2人だけで昼食をとることになってしまい、それでは家で食べているのと変わらない」という。その点、「きらりん広場」では、フロアがひとつしかなく、参加者みんなでひとつのグループになれ、輪から外れることがないので、それがとても良いという。センターと比べれば小さいスペースではあるが、それを活かし、参加者同士が互いの顔が見える範囲で、和気あいあいと楽しく過ごし、連帯感を生み出しているのである。

このように、2つの意味で、みんなでひとつになれる所が、「きらりん広場」の特徴である。

みんなで作る

「きらりん広場」のもうひとつの特徴は、みんなで作るという視点を大切にしていることである。このことは、スタッフがサービスを一方的に提供するということはせず、参加者主体で活動を行っていくというスタンスによく表れている。例えば、広場で子どもが悪いことをしても、スタッフはあまり指導しないようにしている。あくまでも母親と子どもがメインなので、母親が子どもを注意するのをスタッフは見守るという立場をとっている。また、クリスマスの行事でも、スタッフがプレゼントを買ってきて子どもに渡すという形はとらない。子どもたち

にサンタさんの人形を工作してもらい、それをプレゼントとしている。自分で作った物を自分へのプレゼントにするという形にし、参加者主体の行事になるようにしているのである。



図3 母親方の手作りの名札入れ

こうしたことの積み重ねから、参加者の中にも、みんなで広場を作っていこうという意識が生まれてきている。例えば、入口の横にある「名札入れ」(図3参照)は、参加者が自主的に作ってくれたものであるし、広場の活動や「お楽しみ会」の準備等では、参加者がよく手伝ってくれるという。

このように、参加者主体で、みんなで広場を作っていくというのが、「きらりん広場」のもうひとつの特徴である。

(3) 「おやこきらりん広場」そして「きらきらくらぶ」のこれから

みんなでひとつになり、みんなで作り上げていくスタイルをとる「きらりん広場」。始めて3年に満たない活動であるが、大雪が降ってもタクシーでやってくる親子がいるほど、本当に必要とされている広場である。いつまでも親子に必要とされる広場であり続けることが、今後の課題であろう。

「きらりん広場」の活動も含め、「きらきらくらぶ」全体の今後について、林さんに尋ねてみると、意外にも「あまり遠くを見ていないんです」という言葉が返ってきた。これまでも、いつも目標を定めながらやってきたのではなく、常にひとつの活動の中から新たなニーズが生まれ、それらに対応していたら、たまたま今の形になったのだという。とりあえず現状では一時保育へのニーズが強いので、そこへの対応を考えているとのことだった。一時保育の「きらりん一む」の開設もそのひとつである。

「きらきらクラブ」を利用する母親たちからは、将来的には保育園にしてほしいという声があるそうだ⁸⁾。近年は市の保育園が民営化されるなどの動きもあるが、社会福祉法人格を持たない現状のままでは、財政的なことや経営面を考えると不安があるという。もし社会福祉法人格を取得するとなれば、母親方の一層の協力が不可欠となる。子育てに奮闘する母親たちの視線にあわせ、常に母親たちの必要に応じて臨機応変に対応するという「きらきらくらぶ」本来の持ち味をさらに生かすための今後の方途を、林さんは模索し続けている。今後の展開に注目したい。

おわりに

私たちが「きらきらくらぶ」の活動の取材を通して得た子育て支援のヒントは次のようなものである。

まず、「みんなで支えあう」ということである。「きらきらくらぶ」の活動自体が孤独になりがちな母親を支えようと始まったことであるが、その精神は今も受け継がれている。子どもと触れ合うことを通して、子どものすばらしさ、人間の素晴らしさを分かち合い、母親を1人にしないための工夫が様々に凝らされている。

次に行政との連携である。母親そして父親が「これなら子どもを安心して育てられる」、「育ててみたい」と思える環境整備・条件整備は少子化を食い止め、出生率を上げようとす

る上で欠かせない。それは単に児童手当を増額する等の経済的支援だけでは行き届かない。むしろ人的・物的な環境整備が重要であると思われる。「きらきらくらぶ」のような保育・支援事業は、極めて心強い存在である。このような事業の存在は行政との緊密な連携があってこそ可能なのではなからうか。NPOだけではできない部分、行政だけではできない部分を互いに補い合いながら子育て支援の輪を広めていくところに大きなヒントがあるのではないかと考えられる。おそらく「きらきらくらぶ」のようなNPO団体と行政との息の合った持続的な取り組みが、出生率の増加となって表れているのではないだろうか。両者の連携に今後も一層注目していきたい。

3つ目に「現場主義」である。「きらきらくらぶ」にとっての「現場」とは、母親が子どもを育てながら生きるという、まさに現実の生活そのものである。母親が日頃の生活の中で、どのような場面に遭遇したときに困るのか、悩むのか、それらに対してどのような手を差し伸べられるのか、林さんは常にそのことを気にかけている。だからこそ母親たちの声を大事にし、少しでも母親たちのニーズに応えようと努力を続けているのである。

少子化が声高に叫ばれその対策が急がれるが、ともすれば、まず少子化対策あり、まず子育てでサークルありきで器だけが先行してしまう恐れがないだろうか。実際に子育てに当たる母親たち、父親たちの声に耳を傾け、器よりも中身を重視した支援策が求められる。

インタビューの最後に林さんは最近の「家庭の子育て力」の低下に強い懸念を示していた。日頃母親と接する中で、子育てについて本当にどうして良いか分からず悩み戸惑う母親が、実に沢山いるというのである。しかし、そのような母親たちに対して、「昔はこうだったから、あなたもそうできるはずだ」とは言えないという。子育てをめぐる状況は昔とは大きく様変わりし、とても「昔と同じ」と簡単に言い切れない時代になっている。そうしたことを周囲が理解する必要があるという。また、母親たちの子育て力の低下は、母親自身が小さい子どもと接する経験を何も積んでこなかったためではないかと林さんは考えている。だからこそ、林さんは、母親たちがあるいは父親たちが交流できる場を作り、小さい子どもと触れ合う機会を設ける必要があると考えているのである。ただ預かるだけではなく、それらを通して子育ての喜びと楽しみを母親・父親に広めていきたいと考えているのである。

林さんの視線は常に母親にある。不安を抱え悩みながら子育てに当たる母親たちの心強い味方として、今後も「きらきらくらぶ」はあり続けるだろう。

(角替弘規・石井久雄)

< 参考資料 >

- ・内閣府「2006年版 少子化白書」(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2006/18pdfhonpen/18honpen.html> 最終アクセス 2007年3月10日)
- ・福井県「元気な子ども・子育て応援計画」2005年3月(<http://info.pref.fukui.jp/jidou/genki-plan.htm> 最終アクセス 2007年3月10日)
- ・福井県敦賀市「つるが いきいき子ども未来プラン 次世代育成支援対策行動計画」2006年3月(<http://www.ton21.ne.jp/main.asp?fl=list&id=1000045706&clc=1000000031> 最終アクセス 2007年3月19日)
- ・辻岡雄幸(福井県子ども家庭課参事)「福井県における少子化対策」2006年12月(<http://www>.)

<注>

- 1) 福井県には、様々な「お講」があるという。「集落内で同じお寺の檀家が集まって行う月々の「お講」、女性（主婦）、若者の年齢集団が行う講など、さまざまな内容の講が育まれてきた。これらの講では、法話や読経の後で伝統的な料理で会食をし、世間話をした。また、村落の講集団は葬式の準備・運営・読経等にも関わり、仲間の結束を強固なものにしてきた。講に集まる機会は激減したが、現在も各地で行われている。また、家々で行う報恩講は先祖供養を兼ねており、親類や近隣との交際の機会になっている」（福井県「福井県健康長寿調査分析報告書」2005 年 3 月）。
- 2) 以下、敦賀市に関するデータについては「つるが いきいき子ども未来プラン」による。
- 3) 「きらきらくらぶ」への調査は、2006 年 12 月 14 日の午後 14 時 30 分から 2 時間程度、「きらきらクラブ」代表の林さんにインタビューを行う形で実施した。
- 4) 年間保育料には保険料、新年度の準備費、年間材料費が含まれる。また、月保育料は年間で必要とする費用を 12 ヶ月で割ったもの。
- 5) <http://www1.rcn.ne.jp/~kirakira/> 最終アクセス 2007 年 3 月 11 日。
- 6) 幼稚園では 2 歳児の預かりのみ。他の年齢の子どもの保育は他所で並行して行われた。「ミニ・プレイルーム」は 1996 年頃まで継続した。
- 7) 「おやこきらりん広場」への調査は、2006 年 12 月 14 日の 13 時から 1 時間程度、広場の活動中に、スタッフの保育士にインタビューを行う形で実施した。
- 8) 現状においても、「きらきらくらぶ」は無認可保育園としての登録をしている。